

青い花の香り

小川未明

青空文庫

のぶ子こという、かわいらしい少女おとめがありました。

「のぶ子こや、おまえが、五つ六つのころ、かわいがつてくださった、お姉さんねえの顔かおを忘れわすてしまったの？」と、お母さまかあがいられると、のぶ子こは、なんとなく悲かなしくなりました。

月日つきひは、ちようど、うす青あおい水みずの音おとなく流ながれるように、去さるものです。のぶ子こは、十歳さいになりました。そして、頭かしらを傾かたむけて、過すぎ去さった、そのころのことを思い出おもい出だそうとしました。うす青あおい霧きりの中なかに、世界せかいが包つつまれているようで、そんなような姉ねえさんがあつたよう、また、なかつたような、不確ふたしかさで、なんとなく、悲かなしみが、胸むねの中なかにこみあげてくるのでした。

「そのお姉さんねえは、いまどうしていなさるの？」と、のぶ子こは、お母さまかあに問といました。

「遠方えんぽうへ、お嫁よめにいつてしまわれたのよ。」と、お母さまかあも、その娘さんむすめのことを思い出おもされたように、目めを細ほそくしていわれました。

「遠方えんぽうへつてどこなのですか。」と、のぶ子こは黒くろい、大おおきな目めをみはつて、お母さまかあにききました。

「幾日いくにちも、幾日いくにちも、船ふねに乗のつてゆかなければならない外国がいこくなんだよ。」

こう、お母さまがいわれたときに、のぶ子は思わず、目を上げて、空の、かなたを見るようにいたしました。

「ほんとうに、いま、そのお姉さんがおいでたなら、どんなにわたしはしあわせであろう。」「と、のぶ子は、はかない空想にふけたのであります。しかし、その願いもかまわないばかりか、せめて、そのお姉さんの顔を一目でもいいから見たいものだと思いました。「お母さま、そのお姉さんは、どんなお方でしたの?」と、のぶ子は、どうかして、そのかわいがつてくださったお姉さんを、できるだけよく知ろうとして、きました。

お母さまは、また目を細くして、過ぎ去った日を思い出すようにして、「それは、美しい娘さんだったよ。みんな通りすぎる人が、振り向いていったもんです。」「と、いわれました。

「どうか、そのお姉さんの写真でも見たいものです。」「と、のぶ子は、ほんとうにそう思いました。

「いまごろ、どうなされたか。ほんとうに写真があつたら、いいのだけれど……。」「と、お母さまは、その後、たよりのない、娘さんのことを思い出して、やはりのぶ子と同じような悲しみを感ぜられたのであります。

その年の秋の、ちょうど彼岸ごろでありました。外国から、小さな軽い紙の箱がとどきました。

「だから、きたのでしようね。」と、お母さまはいつて、差出人の名まえをごらんなさったが、急に、晴れやかな、大きな声で、

「のぶ子や、お姉さんからのだよ。」といわれました。

そのとき、のぶ子は、お人形の着物をきかえさせて、遊んでいましたが、それを手放して、すぐにお母さまのそばへやってきました。

「わたしをかわいがってくださいくださったお姉さんから、送ってきたのですか？」と、のぶ子はいいました。

「ああ、そうだよ。」

お母さまは、その小さい、軽い箱のひもを解きにかかりながら、

「なんでしようね？」といわれました。

秋の静かな、午後でありました。弱い日の光が、軽い大地の上になぎついていました。

のぶ子は、熱心に、母が、箱を開けるのをながめていました。やがて、包みが解かれると、中から、数種の草花の種子が出てきたのであります。

その草花の種子は、南アメリカから、送られてきたのでした。「きつと、美しい花が咲くにちがいない。」と、みんなは、たのしみにして、それを黒い素焼きの鉢に、別々にして植えて大事にしておきました。

ほんとうに、久しぶりで、そのお姉さんからは、たよりがあつたのです。そして、その手紙の中には、「のぶ子さんは、どんなに大きく、かわいらしく、おなりでしょうね。」と書いてあつたのです。

この種子を土に下ろした日から、花の咲く日が待たれました。その年も暮れて、やがて翌年の春とつたのであります。

「お母さん、南アメリカの温かいところに育つ花ですから、こちらでは咲かないかもしれませぬね。」と、のぶ子は、ある日、お母さまに向かつていいました。

このとき、もう、黒い素焼きの鉢には、うす紅い芽や、ねずみ色に光つた芽が出ていました。

「よく、日の当たるところに移して、大事にしてごらんなさい。」と、お母さまは、それに対して答えられました。

春の彼岸が過ぎて、桜の花が散つたころ一つの鉢から真紅な花が開きました。その花は、

あまりに美しくもろかったのであります。そして、その日の黄昏方、吹いてくる風に散つてしまいました。

もう一つの鉢からは、青い色の花が咲きました。しかし、このほうは、珍しく、元気がよくて、幾つもの花を開きました。そのうえ、ほんとうになつかしい、いい香りがいたしました。

のぶ子は、青い花に、鼻をつけて、その香気をかいていましたが、ふいに、飛び上がりました。

「わたし、お姉さんを思い出してよ……。」こう叫んでお母さまのそばへ駆けてゆきました。

「わたし、あの、青い花の香りをかいで、お姉さんを思い出したの、背のすらりとした、頭髮のすこしちぢれた方でなくって？」といいました。

「ああそうだったよ。」と、お母さまは、よくお姉さんを思い出したといわぬばかりに、我が子の顔を見て、につこりと笑われました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷発行

1981（昭和56）年1月6日第1刷発行

※表題は底本では、「青《あお》い花《はな》の香《かお》り」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年7月16日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い花の香り

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>